

# 名取川河畔に野鳥の森作り

たいはくさん  
太白山ふれあいの森協力会 会長 太田武治

## 「名取川」の概要と「野鳥の森」の位置

宮城県には一級河川として「北上川」<sup>きたかみがわ</sup>、「阿武隈川」<sup>あぶくまがわ</sup>、「鳴瀬川」<sup>なるせがわ</sup>、「名取川」の4河川がある。そのなかで「名取川」は幹川疏路延長が最も短く、支流併せて30河川で総延長295.52km、本流は42.54kmである。また、支流の「広瀬川」は40.03kmである。「名取川」の源流は山形県との境にある「二口峠」<sup>ふたくちとうげ</sup>である。その下流には「磐司岩」<sup>ばんじいわ</sup>という切り立った絶壁があり、すばらしい景観を呈する。

さらにその下流には日本3名滝の一つに数えられる「秋保大瀧」があり、高さ55mの大瀑布をなしている。そこから7～8km下流で、北蔵王を源流とする支流である「碓石川」<sup>ごいしがわ</sup>と合流する。この「碓石川」には「釜房ダム」<sup>かまふさ</sup>がある。この合流地点より4km下流にある「茂庭」<sup>もにわ</sup>という地域が私の居住地であり、そのやや上流に「野鳥の森作り」の場所がある。

## 活動を始めるにいたる経緯

大正12年に生まれた私は、幼少の頃より、家の近くを流れる「名取川」に日頃から慣れ親しんできた。当時は、子どもでも浅瀬で小魚を捕まえることができるほどたくさんの魚が生息していた。また、「カワセミ」や「ヤマセミ」をはじめ、水のきれいな溪流にのみ生息する川鳥も多数目にすることができた。この幼少期の「名取川」での経験と色あせぬ強い印象が、今日にいたる活動の契機をなし、その活力源となっている。

やがて時代は第二次大戦期へ、私も旧高等小学校卒業と同時に、当時横須賀市にあった海軍航空技術廠養成所へと入所する。いまだ15歳の少年であった私は異郷の地での生活に慣れることもできず、特に幼少期に「名取川」に慣れ親しんだ日々の事が折に触れ胸に去来し、望郷の念に駆られることも多々あった。しかし、当時は時代がそれを許さず、ただた



写真1 川面に向かって一休み



写真2 滔々と流れる「名取川」

だ耐え忍び、辛抱するより他がなかった。

やがて終戦を迎え、痩せ衰え茫然自失の身で帰郷した私は、無為の日々を送らざるをえなかった。そうした境涯にあった私であったが、懐かしい「名取川」を再び目にして、「國破れて山河あり」の言葉が浮かび、心の内に日々を生きる意欲が次第に湧いてくることになった。

その後、私は昭和21年に旧東北配電会社に入社し、「名取川」下流の発電所に勤務する。

私は「名取川」河畔に30アールの畑を所有していたが、大正初期に旧二本松電力（現東北電力に合併）が「名取川」近辺に「茂庭発電所」<sup>もにわ</sup>を建設するにあたり、遂道建設のための土砂捨て場とし

て私の畑が買収され、そのうち20アールに土砂が捨てられているという状態であった。

その後、戦後の農地解放政策により農地が私のもとへと戻ってきたが、上述の通り20アールは土砂が捨てられた状態であり、大小の岩石と粘土混じりの土壌は畑として使うことはできなかった。幼少期の忘れえない印象も手伝い、私の「名取川」へ寄せる想いは強いものであった。そして川環境に幾分なりとも貢献できればとの想いもあり、その利用できない土地を河畔に生息する川鳥のための休息場にしようと考え、昭和43年より森作りを始めたのである。

#### 「野鳥の森作り」の展開

森作りを始めた当時、「名取川」上流の杉山は戦後期の乱伐にあい、それにより河川の汚染が始まっていた。その後、杉の商品価値低下により、山川共に荒れ果てていった。

こうした状況を受け、私は「名取川」活性化へ貢献できる策を考え、植樹活動始める。

川に面した水捌けのよい傾斜地にスギを植え、またその上部の平坦地にはヤマモミジ、ナラ、クヌギを、低木としてはヤマツツジ、ヤマブキ等を植樹する。この際、シャクナゲやヤマブキなど、当

地に自生している植物をそのまま生長させることを心掛けた。

こうした結果、活動を始めて30数余年を経た今日では「野鳥の森」ですばらしい花を咲かせるまでになり、春・秋にはその美しい景観に小鳥も寄ってくるようになった。植樹した樹木の種類も現在では20数種類に及んでいる。

日常的な活動としては、草刈やゴミ拾いなどを行っている。また、実のなる木を植えることで激減しつつある河鳥のための環境を取り戻せるようにしている。

こうした30数余年の活動の継続により、ようやく森らしい姿を取り戻しつつある一方で、かつては清流として有名であった「名取川」はここ7～8年急激に汚染が顕著になっている。それが原因なのか、川鳥も年々減少する傾向となった。こうした状況のなか、5～6年前に森のスギの木の下で二羽続けて「ヤマセミ」の死骸を見つけました。近くを徘徊する野良猫の仕業であるとわかり、「ヤマセミ」がいつも夜を過ごすスギの木の下枝を、森林組合に依頼して枝打ちをしてもらいました。

また、2000年11月には「名取川」の源流である「二口峠」近くまで「ヤマセミ」を探すため、

二度にわたり探し歩いてみたものの、「ヤマセミ」



写真3 枝打したスギとヤマツツジ



写真4 シャクナゲとヤマブキ

## 名取川河畔に野鳥の森作り

たいはくさん  
太白山ふれあいの森協力会 会長 太田武治

写真5 「野鳥の森」から望む「名取川」と釣り人

の姿を目にすることはできず、また他の川鳥も僅かに見られる程度であった。もはや「名取川」に「ヤマセミ」はいないのかと諦めていた最中、なんと私の「野鳥の森」に飛来した番の「ヤマセミ」を見ることができたのである。

川鳥を目にすることが難しくなった状況にあって、名取川水系に、私の森にいる番の「ヤマセミ」を大切に保護するべく、努力している。

甲高い声で春の訪れを告げ、野を走る姿が可憐な「チドリ」。美しいコバルト色の羽毛に覆われ、小柄ながらその太く大きな嘴で俊敏に魚を捕らえる「カワセミ」。大柄で嘴が大きく、番で川面を矢の如く飛翔する「ヤマセミ」。そのほか、いろいろな鳥との出会いは私の少年時代より現在にいたるまで、色あせない強い印象があり、なんとかこうした鳥たちの安らぎの場を作ろうと、現在も活動に打ち込んでいる。

河川の汚染が顕著になり、野鳥の姿を目にすることも少なくなったが、森らしい姿を取り戻しつつある、私の30数年にわたる活動の結晶たる「野鳥の森」では、春から秋にかけてたくさんの里山の小鳥や、「キジ」の親子が列をなしている姿をみることができる。

これらを目にすると、野鳥にとって決して安住の

地が保証されてはいない今日にあって、せめてもの安らぎを感じるのである。

## 今後の展望

名取川は古よりその美しい姿を和歌に読まれてきた。

名取川 川なる鳥は なかれても  
したゆく水の ますかとそおもふ

名取川を渡りけるに、岸の紅葉のかげを見て  
能因法師

名取川 きしの紅葉の うつるかげ  
同じ錦を 底にさえしく 西行法師

今日の世にあっては、山も川も荒れ果てているといえる。このように山川が荒れ果てていれば、ひいては国土全体の環境の悪化をも伴う。こうした状況にあって、今こそ官民一体となり、環境の保全とそのための新たな秩序の創造へ向けて、努力せねばならない。

私の活動の結晶たる「野鳥の森」は、決して広くはないものの、今日の姿にいたるまでその活動は「名取川」をはじめとする自然環境とそこに息づくものたちの生態系への強烈なまでの想いから、30数余年という長年に渡って継続している。

こうした活動を通じて、川への思いはさらに募るばかりである。今後も河畔に飛来する野鳥の安住の地を保障するべく、活動を継続していきたいと想いを新たにす次第である。